

ある晴れた晩秋の日に

「趣味」を問う欄に、たいして迷いもせず「登山」と書いてきたが、近年、何だか違和感を覚えるようになってきた。例え標高千メートルを超える山であっても、山道を2、3時間歩いて山頂に至ることが「登山」なのかという思いがあるし、反面、道なき藪山を這いずり廻っている行為をそう呼ぶのも似合わない気がする。僕が敬愛する植物研究家で、若き頃は登山家でもあった小牧旌先生が言われる「山野跋涉」ほどの清廉枯淡の境地にはまだ遠く、せいぜいが「山歩き」、いや「山遊び」というのが一番当たっているようだ。

*

*

*

たしかに、登山道を辿るだけではなく、沢をつめ、藪や雪の尾根を歩きだせば、山は面的な広がりを持った存在となる。ひとつの山でも季節を変え、次は右俣の沢とか、あの踏跡はどこへ続いているのか、などとやっているとまったくきりが無い。そんな僕の「遊び場」は、概ね医王山から南の標高千メートル前後の山々なのであるが、ほとんど変態的ともいえるこのような「山遊び」を喜ぶ物好きは稀であろうし、付き合わせるのも気の毒というものである。それで、気の合った仲間との山行がかなわない休日が、僕の「遊び場」探究の日となる。その時々、目的、季節、安全性などを総合的に勘案して、最も適当なメニューを選び出すのであるが、情報が整理されておらず、これがなかなか難しい。

*

*

*

先週の土曜日(1999.11.20)は、前夜の残業もあり、行き先を決めたのは例によって朝になってからであったが、いつになくすんなり決まった。吉野谷村の瀬波川キャンプ場から河内村との村境稜線にかけて付けられている「散策道」を調べ、近くにある白山信仰の遺跡とされる「馬屋ノ壺」を探索しようというものである。実は今年の6月初旬、家内と河内側から直海川支流のオンソリ谷を遡ったとき、888mの三角点峰付近にループ状の道があるのを確認し、その道は瀬波川の方から来ているものであろうと推測していたのである。この三角点峰は、恐山または笈山と呼ばれる山で、ナカオ山岳会の『なかお特集号ふるさとの山・2』(1979)に、林正一氏は〔泉鏡花の『風流線』に「昔、西国方の旅の巡礼の若い夫婦、奥三方に詣でむとして途中笈ヶ岳の半腹で不意の寒さに封じられて千丈の雪に埋った。」とある笈ヶ岳は松尾山西の笈山のことであろう。〕と書かれている。また、「オンソリ谷」の地名は、「オソレ(恐れ)谷」の転訛と考えるのが普通かもしれないが、国土地理院の地形図は、この西の谷を「コンソリ谷」と記しており、内尾の下に「下折(そそり)」という集落もあることから、僕は「大ソソリ谷」「小ソソリ谷」(ソソリはそそり立つ・崖地の意か)ではないかと思っている。ともあれ、この一帯は白山修験の影が色濃く残る地域であり、まさに興味を「そそられる」ところではある。

*

*

*

瀬波川支流のエイ谷右岸に付けられた「散策道」に行く。一つ目の堰堤で初級コースを左に見送り、上級コースを取る。道は荒れており、徒渉もあるが、地下足袋をはいてきて正解。三つ目の堰堤からの小尾根には、急な階段が延々と続く。よくもまあこんな道を付けたものだと感心半分、あきれ半分。暑くて夏と同じ半袖シャツ一枚になる。左からの初級コースと合流し、急登は終わってヤセ尾根となる。岩場からの眺めはよく、地図を広げて半時間ほど山座同定に費やす。キノコを探しながらゆっくり登り、うっすらと新雪におおわれた見覚えのあるループ道に達したが、



尾根は広く、現在地さえ確信が持てない。ここで焦っても仕方がないと、まずはビールを飲んで昼食。それから、三角点峰の笈山へ登って現在地を確定し、「馬屋の壺」へのルートを見定めた。しかし、濃密なブッシュにおおわれた尾根は、だだっぴろい上に微妙な小尾根があり、ルートファインディングが難しい所。再三、ルート修正を余儀なくされた。

ようやく鞍部に下ると、エイ谷支流の小沢の源頭から踏跡らしきものがあり、これをほんの少し下ると、2m四方ほどの石積みがあった。「馬屋の壺」にしては小さすぎるのではといふかりながらも、水音高く流れるエイ谷支流の沢の上には白山の姿があり、修験の行場には相応しい所であると思われた。写真を撮って引き返す。

帰りは登りなので、神経質になる必要がなく、ブッシュの薄い所を選んで行くと、下りの半分の時間もかからずに登り返すことができた。しかし、この調子良さが仇となって、下り始めてもループ道には一向に出会わない。さらに見覚えのない杉林も出てきて、頭の中は一瞬パニック状態。これはいかんと小キジを打ってお茶を飲み、地図を広げて誤りに気づいた。

＊

＊

＊

こんなふうな、晩秋の一日、僕の「山遊び」は終わった。道のない山は怖い、このスリルがまた、たまらない。いつもうまくいくとは限らないし、「バカくさ物語」に終わることも少なくないのであるが、今回は三つの目的が概ね達成できて、充実感を味わうことができた。ひとつは、6月から気になっていたループ道と「散策道」との関係・位置を明らかにできたこと。ちなみに、石川県勤労者山岳連盟の『新北陸の名山』に記されている「散策道」のルート図は、やはりまったくのデタラメであった。二つめは、これも宿題であった「馬屋の壺」を探索できたこと。そして、三つめは、ナメコは無理でもクリタケぐらいは採れたらと思っていたのだが、それが少し採れたこと。しかも、それは普通のクリタケとは異なり、生長しても傘の裏が灰色にならない新品種のようなのである。商品価値のある「石川ブランド」の栽培キノコとして生産・販売できる可能性もあり（商品名は「白山くりたけ」なんてどうだろうか）、早速、鑑定と組織培養を依頼したところであるが、「山遊び」にはそんな楽しみもある。

(19期 梅 典雅)



次ページからは
アクトス9号 p37-39を
転載。p36の黒滝の写真は
割愛します。
(きれいに印刷できないため)

れている。白山から流れ出る川の源流部は、山頂付近やスーバー林道周辺を除けば、そのほとんどが秘境といってもよい地域である。特に地獄谷やその上にそびえる火の御子峰などは、人を寄せつけない凄絶な崩壊地であり、秘境の最たるものであるといえよう。

私たちの生活している空間とそれほど遠くないところに、荒々しくも未知なる原生自然が今も息づいているということ、は、実に豊かなことであると思う。

とが・のりまさ◎金沢大学ワンダーフォーゲル部OB・グループ「藪」代表

登頂記録 わずか3回。 ハーケン効かぬ 魔の山

火の御子峰には、過去3回しか登頂記録が残っていない。岩盤がもろいためハ

ーケンが効かず、登頂は極めて危険である。初登頂は昭和7年、第2回目の登頂は終戦間もない昭和24年のこと。石川県勤労者山岳連盟の干場晃さん（松任市）はそれから実に44年ぶりに3人のパーティーで火の御子峰登頂に成功した。

「通常より長さが2倍近くもある特注のハーケンを使い、落石や落盤に細心の注意を払いながら頂上を目指しました」（干場さん）

お年寄りや子供さえも気軽に登れる白山の御前峰が表の白山なら、火の御子峰は裏の顔を持つ魔の山である。

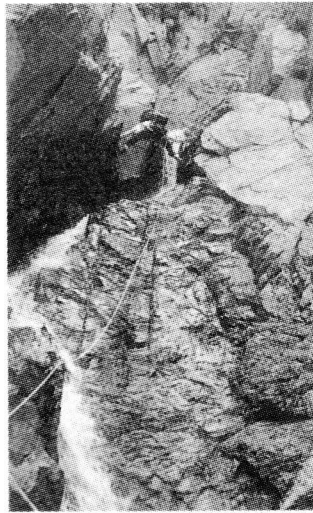


火の御子峰の頂上付近（干場晃さん提供）



火の御子峰登頂を目指す干場さんらのパーティー。平成5年。（干場晃さん提供）

岐阜県側の横谷も難所が連続する秘境である。(根上町の今村道往さん提供)



において定義する「原生流域」という地域がある。これは、人工物や森林伐採地など（登山道や道標は除く）を含まない1000ヘクタール（10平方キロメートル）以上の河川集水域をさすものである。1993年度の調査時点で全国に99カ所あるが、実は石川県には、白山山系に何と5カ所もあるのだ。その内訳は、犀川（1043ヘクタール）、倉谷川（1800ヘクタール）、尾添川（1254ヘクタール）、目附谷川（1320ヘクタール）、中ノ川（1622ヘクタール）の各源流域で面積は計7039ヘクタールにも及ぶ。「原生流域」は3000メートル級の北アルプスを擁する富山県でも意外に少なく、2カ所で計5441ヘクタールである。

日本の イヌワシの 1割が生息

これは、単なる調査上の基準といえはそれまでであるが、白山という山のひとつの特質を表しているように思う。白山

は、高山帯の面積に比べて山地帯の面積が広く、急峻な地形と多量の積雪によって奥地までは人の手がほとんど入らなかった。そのため、野生生物の宝庫として、ユネスコの「生物圏保護区」や林野庁の「森林生態系保護地域」などに指定されている。例えば、山地の自然環境の指標となるイヌワシについてみると、全国の推定生息数400〜500羽のおよそ1割が、白山山系に生息しているのである。白山には、山頂から四方八方に登山道があるが、そのほとんどは尾根道であり、面的には細い線でしかない。その間は、幾筋もの溪谷が走り、山腹はタケカンバやブナ、ミズナラなどの深い森におおわ



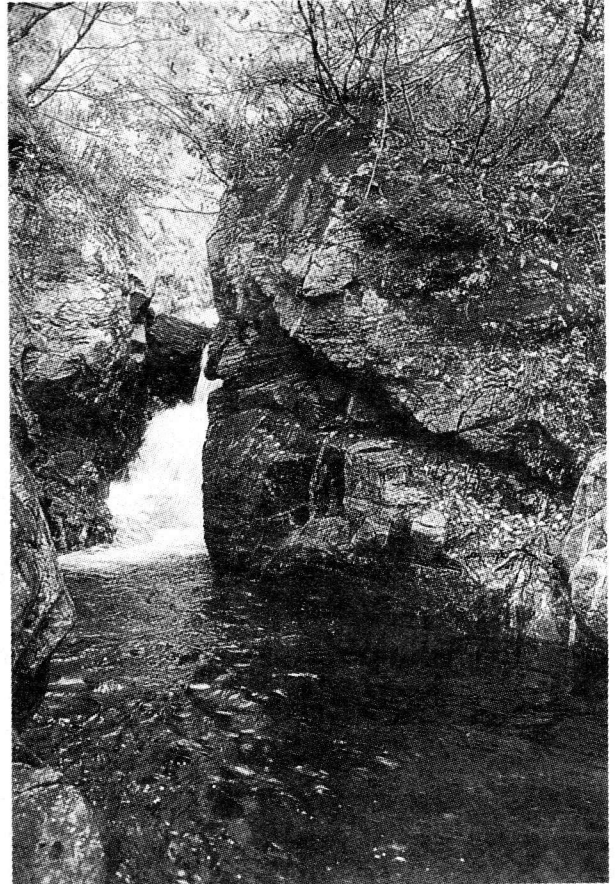
北陸 Land of mystery in HOKURIKU の 秘境

石川県
白山
源流域

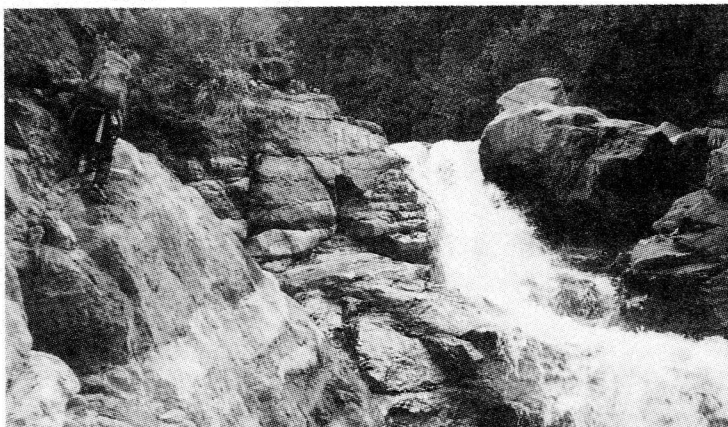
左／雄谷S字峡の紅葉。ブナやミズナラ、カエデが妍（けん）を競う。
下／水晶谷。大笠山に源を発し、蛇谷支流の雄谷に合流する。源流域の千丈平や笈ヶ岳一帯も原生的な自然が残る。



市ノ瀬から雪上徒歩3時間の山中にある。幹周は15.6メートル。カツラの木としては日本一の巨樹である。（金沢市の北川正司さん提供）
右／水晶滝。水晶谷の源流に懸かる二条の滝で、落差は30メートルほど。菊仙女の伝説を思い出させる幽玄な雰囲気がある。



仙人谷の激流をさかのぼる。(根上町の今村道往さん提供)

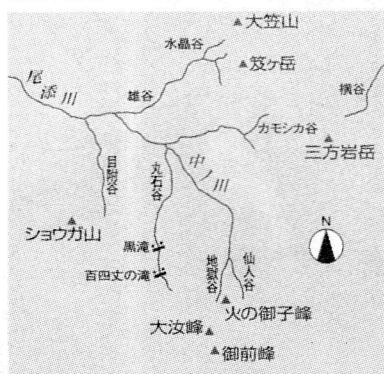




上／別山谷の滝に挑む。滝を登るには熟練の技術が必要だ。(根上町の今村道往さん提供)

右／百四丈滝(ひやくよじょうのたき)。四塚山に源を発する丸石谷に懸かる滝で落差は約90メートルと白山の滝では最大級。昔は千丈滝と呼ばれた。加賀禅定道からも望見されるが、近付くのは容易ではない。

下／蛇谷の支流には、沢登りのエキスパートのみが入谷できる険悪な谷が多い。カモンカ谷もその一つ。国見山北の稜線から見下ろす源頭部は一枚岩の大スラブ帯が続く。



閉鎖的で
威圧的な谷

当たり前のことではあるが、山は尾根と谷から成っている。谷は常に水流と地表がせめぎあう躍動の世界であり、兩岸が切り立った「廊下」や地図にも載っていない幾多の滝といった多彩な景観を有する山のもう一つの顔である。しかし、日当たりのよい尾根に比べて、谷は一般に閉鎖的で暗く、ときには威圧的のすらある。なかには、高度な溯行技術と体力を持った者にしか知られていない険谷もある。「秘境」を「人のめったに行かない、世間に知られていないところ」とするならば、そういった渓谷やその源流域は、秘境に違いない。

また、あまり知られていない言葉であるが、環境庁が自然環境保全基礎調査(緑の国勢調査)の一環である河川調査

北陸
Land of mystery
in HOKURIKU
秘境

石川県
白山
源流域

7000ヘクタールの“未踏”の地

文・写真◎榎典雅

◎神と自然の観念、現代に、褥典雅

白山信仰、越前禪定道復活の意義

本文：今夏、白山信仰の登拝路の一つであった越前禪定道の一部が復活した。市ノ瀬から慶松平まで五キロの区間で、そこから観光新道に合流して室堂に至る。この道は別当出合からの砂防新道が整備された後も旧道と呼ばれ、昭和の中ごろまでは通る人もあったルートである。

●泰澄踏み分けの道

ところで、古来から神仏の坐します山として崇拝されてきた白山に登拝路が開かれたのはいつの頃からなのであるか。

白山比＝神社に伝わる『白山記』には「天長九年(八三二)に三方の馬場を開いて、そこから御山に参詣する」と書かれている。「三方の馬場」とは加賀、美濃、越前における白山信仰・登拝の拠点と解され、加賀馬場は現在の白山比＝神社(石川県鶴来町)、美濃は長滝白山神社(岐阜県白鳥町)、越前は平泉寺白山神社(福井県勝山市)がそれにあたる。そして、各馬場から白山山頂に至る道を「禪定道」と呼び慣わしてきた。「禪定」とは『白山記』では白山山頂のこととしているが、修行のための登拝を意味する言葉でもある。

白山は越前の僧泰澄によって養老元年(七一七)に開かれたと、越前馬場最古の縁起書『泰澄和尚伝』は伝える。その開山伝承から越前禪定道は「泰澄大師踏み分けの道」とか「白山本道」などとも呼ばれ、平泉寺から法恩寺山、小原峠を越え、三ツ谷、市ノ瀬を経て六万山に登り、現在の観光新道を通って室堂、御前峰に達していた。

加賀禪定道は、尾口村の一里野から四塚山までの間が昭和六十二年(一九八七)に復元された。また、美濃禪定道は、今でも石徹白道(南縦走路)として利用されている。

●三本の登拝路そろう

今回、復元整備された越前禪定道のルートは、昭和九年の大洪水まで湯の谷左岸にあった旧白山温泉からの道に近いものであり、急な坂が六万山山頂付近に続く。この先には「檜宿」があったとされ、石段とも見える石積や江戸期の紀行文にいう「権現の愛木」とおぼしきヒノキの巨木がある。

近年の地形図に「指尾山(一四一八メートル)」と記される峰は、御前峰、大汝峰、別山の白山三所権現が望まれる遙拝地「伏拝」であった。天井壁のヤセ尾根の途中には「泰澄剃髪所」と伝えられる「剃刀窟」があり、明治の廃仏毀釈によって破壊された石仏が

残る。

五輪坂を登り、江戸期から明治中期にかけて慶松室が存在したという慶松平(尾平)を過ぎれば、別当坂で観光新道に出合う。

今回の越前禪定道の復元により、白山に開かれた三つの禪定道すべてにおいて山ろくの拠点と山頂が結ばれた。どの道にも多くの遺跡や伝説が残り、古の登拝者をしのぶことができる。豊かな自然と信仰の歴史が白山の特質であるなら、禪定道はそれを具現化するものといえよう。

●「擬死再生」の登拝

昔の人は現代の登山者の何倍もの時間と労力をかけ山頂にたどり着いたに違いない。その行為そのものに罪やけがれを落として新たな自分に生まれ返る「擬死再生」の意味があったのかもしれない。また、荒涼とした火口跡に地獄を見、畳ずく山々を埋める雲海や一面のお花畑に浄土を感じたであろうことは想像に難くない。それこそが「禪定」であったのであろう。神と自然は信仰という糸で結ばれた同一の観念であったとしたならば、それを犯すことなどできるわけがない。

我々現代人は、さまざまな効率と引き換えに、大切な何かを忘れてきたように思う。また、自然を科学的に観ようとすればするほど、魂を揺さぶるような感性が失われてゆくのもかもしれない。自然と人との共生をいうなら、我々の命と文化の根源である自然に対する

畏敬の心を忘れてはなるまい。

(とが・のりまさ＝石川県自然保護課企画専門員、金沢市)

(＝は口ヘンに羊)